

佐賀県研究成果情報（作成 2020年3月）

- [情報名] イチゴ「佐賀 i9 号」は、花芽分化直後に定植することで、年内収量が増収する。
- [要約] イチゴ「佐賀 i9 号」は、花芽分化した直後の 9 月中旬に定植すると、年内収量が 9 月下旬定植と比較して約 20% 以上増収する。また、第 1 次腋果房以降の収穫開始日および果房間葉数は同等で、収量も同等以上となる。
- [キーワード] イチゴ、「佐賀 i9 号」、定植時期
- [担当] 上場営農センター・研究部・畑作・野菜研究担当
- [連絡先] 0955-82-1930・uwabaeinousenta@pref.saga.lg.jp
- [分類] 技術者参考
- [部会名] 上場営農専門部会
- [専門] 栽培
- [背景・ねらい]

平成 22 年からいちご次世代品種緊急開発プロジェクトに取り組み、平成 30 年に新品種「佐賀 i9 号」が品種登録された。「佐賀 i9 号」は果皮色が濃赤で収量が多く、食味に優れることからポスト「さがほのか」として期待されている。しかし、「さがほのか」と比較して花芽分化が遅く、定植時の内葉数が多いことから、高単価である年内収量の確保が課題となっている。そこで、早期定植が年内収量および収量に及ぼす影響について明らかにする。

[成果の内容]

1. 「佐賀 i9 号」の花芽分化は、「さがほのか」と比較して 4 日程度遅い（表 1）。
2. 頂果房の収穫開始日は、9 月下旬定植と比較して 9 月中旬定植では 4～10 日程度早くなる。また、早植えしても第 1 次腋果房以降の収穫開始日および果房間葉数は 9 月下旬定植と比較して同等である（表 2）。
3. 9 月中旬定植は、9 月下旬定植と比較して年内収量が約 20% 以上増収し、収量は同等以上となる（図 1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 高設栽培（培土：イチゴ高設培土唐津型）において、定植直後から試験終了時までチラー RKE750A-V(ORION)と冷却用ポリエチレンチューブ（紀伊産業）を用いてクラウン部を 20 程度に制御した中で得られた成果である。
2. 本試験は、標高約 100m の上場営農センターで行っており、佐賀平坦部では 9 月中旬に花芽分化していない場合もあるため、定植前に必ず花芽分化を確認する。

[具体的なデータ]

表1 育苗期の花芽分化状況 (2018年度)

品種	花芽分化指数			分化率 (%)		
	9月6日	9月10日	9月14日	9月6日	9月10日	9月14日
佐賀 i9号	0.4	0.4	3.4	29	43	100
さがほのか	0.7	2.4	3.3	29	100	100

注1) 採苗日: 7月20日

注2) 調査数: 7株

注3) 花芽分化指数: 0: 未分化, 1: 肥厚初期, 2: 肥厚中期

3: 肥厚後期, 4: 二分期, 5: ガク片形成期

表2 「佐賀 i9号」の定植日の違いによる収穫開始日および花房間葉数

定植日	頂果房		第1次腋果房		第2次腋果房		第3次腋果房	
	収穫開始日	果房間葉数 (枚)	収穫開始日	果房間葉数 (枚)	収穫開始日	果房間葉数 (枚)	収穫開始日	果房間葉数 (枚)
9/14	12/11±4.2	4.1±0.4	2/11±12.0	4.3±0.5	3/24±9.2	3.2±0.6	4/11±3.5	3.4±0.4
9/20~21	12/15±4.2	3.7±0.3	2/12±12.0	4.0±0.1	3/25±9.9	3.0±0.6	4/13±5.7	3.4±0.8
9/28~29	12/21±1.4	2.9±0.4	2/5±6.4	4.5±0.2	3/18±7.8	3.4±0.6	4/9±4.9	3.3±0.6

注1) 数値は2017年度と2018年度の2か年の平均値

注2) 各年度10株の2反復

注3) 収穫開始日は各果房の頂果の平均値

注4) ±は標準偏差値

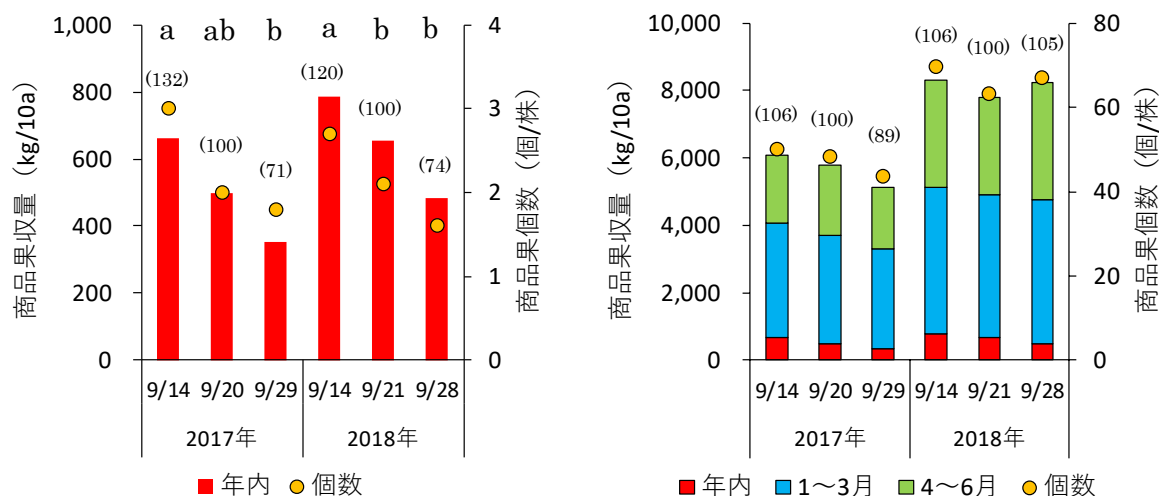


図1 「佐賀 i9号」の定植日の違いによる収量および個数 (左: 年内、右: 全体)

注1) 各年度10株の2反復

注2) 同年次の異なるアルファベット間にはTukeyの多重検定により有意差あり (5%水準)

注3) () 内の数値は9月20日および9月21日を100とした場合の収量対比

[その他]

研究課題名: いちご新品種「佐賀 i5号」, 「佐賀 i9号」の栽培技術の開発

予算区分: 県単

研究期間: 2017~2018年度

研究担当者: 伊東寛史、中野裕一郎、中島正明、平野優徳、浦田貴子